

京都大学人文科学研究所共同研究実績・活動報告書

(1年計画の1年目)

1. 研究課題

東アジアにおける阿弥陀如来の表象

The Representation of the Amitabha Tathagata in East Asia

2. 研究代表者氏名

高橋 早紀子

Takahashi Sakiko

3. 研究期間

2020年4月-2021年3月(1年目)

4. 研究目的

西方極楽浄土の教主である阿弥陀如来は、大乘仏教の中心的な尊格である。阿弥陀如来に関する造形芸術は独尊形式や三尊形式の尊像、浄土変相図や来迎図と多様で、そこには阿弥陀如来に対する様々な思想や信仰の反映が考えられる。

そこで本研究の目的は、東アジアにおける阿弥陀如来の表象についての考察を通じて、阿弥陀如来に対する多様な思想や信仰の一端を追究することにある。具体的には、中国や日本の作例を主な対象として阿弥陀如来の像容や極楽浄土の様相について検討し、図像上の特色や思想的背景に関する議論を深めることを目指す。

日本・中国・西域・ガンダーラの美術史学や考古学を専門とする班員を中心に、広い視野から阿弥陀如来の造形芸術について考究する本研究には、分野横断的学際研究としての意義がある。さらに、当該分野の第一線で活躍する若手研究者の講演を計画する本研究班には、研究期間終了後にも持続可能な若手研究者の学術ネットワークを構築するという意義もある。

The Amitabha Tathagata, the ruler of the Western Pure Land, is one of the primary Buddhas of Mahayana Buddhism. The various artworks that have been created, such as the images of individual Amitabha or the Amitabha Triad, the representation of the Western Pure Land, and the image of the descent of Amitabha, all reflect various thoughts or expressions of faith in the Amitabha Tathagata. This research team seeks to investigate these various aspects of religious thought or faith by examining how the Amitabha Tathagata and the Western Pure Land have been

represented in East Asia. For instance, we will hold two workshops and discuss the various iconographic and religious functions, based on the differing imagery and representations of the Amitabha Tathagata and the Western Pure Land in China and Japan. This research team, including art historians and archaeologists who specialize in Gandhara, the Western Regions, China, and Japan, will also help advance interdisciplinary studies.

5. 本年度の研究実施状況

東アジアにおける阿弥陀如来の表象についての考察を通じて、阿弥陀如来に対する多様な思想や信仰の一端を追究すべく、二回の研究討論会（11月7日・12月5日／Zoomによるオンライン実施／参加者約60名）を開催した。第一回の研究討論会「日本の仏教彫刻—作品生成の場」は、高橋とゲストスピーカーの山口隆介氏（奈良国立博物館）、三田覚之氏（東京国立博物館）を発表者とし、第二回の研究討論会「尊像の姿と作用—阿弥陀仏と四天王を例に」は、班員の田中健一氏（文化庁）、高志緑氏（日本学術振興会）、檜山智美氏（京都大学）、ゲストスピーカーの佐藤有希子氏（奈良女子大学）を発表者とし、班員以外の当該テーマに関心をもつ研究者にも公開した。いずれも、当日は約60名が参加し、最新の知見に基づく活発な質疑応答が行われた。

6. 本年度の研究実施内容

2020-11-07 日本の仏教彫刻—作品生成の場 広隆寺講堂阿弥陀如来・地藏菩薩・虚空蔵菩薩坐像と道昌 発表者 高橋早紀子 愛知学院大学 快慶の阿弥陀仏造像 発表者 山口隆介 奈良国立博物館 法隆寺金堂における四天王の世界 発表者 三田覚之 東京国立博物館
2020-12-05 尊像の姿と作用—阿弥陀仏と四天王を例に 飛鳥時代の阿弥陀造像 発表者 田中健一 文化庁 懺法との関わりから見た阿弥陀像—淳熙十年銘「阿弥陀浄土図」を中心に 発表者 高志緑 学振特別研究員・人文科学研究所 西域北道の仏教石窟壁画に描かれた四天王とその眷属の図像 発表者 檜山智美 京都大学白眉センター 中世絵巻に表された毘沙門天像（補足・質疑） 発表者 佐藤有希子 奈良女子大学

7. 共同研究会に関連した公表実績

なし

8. 研究班員

所内

稲本泰生、岡村秀典、向井佑介

学内

根立研介(文学研究科)、内記理(文学研究科)、檜山智美(京都大学白眉センター)、高志緑

(人文科学研究所)、折山桂子(文学研究科)、カルロッタ・アヴァンツィ(文学研究科)
学外

折山桂子(独立行政法人九州国立博物館)、田中健一(文化庁)、田林啓(白鶴美術館)、佐々木
守俊(清泉女子大学人文科学研究所)

9. 共同利用・共同研究の参加状況

区分	機関数 (必須)	受入人数					延べ人数				
		総計	外国人	若手研究者	若手研究者	大学院生	総計	外国人	若手研究者	若手研究者	大学院生
				(40歳未満)	(35歳以下)				(40歳未満)	(35歳以下)	
学内(法人内)	3	8	1	2	1	2	17	2	4	2	4
		(4)	(1)	(1)	(1)	(2)	(10)	(2)	(2)	(2)	(4)
国立大学	6	22	6	2	0	17	33	9	3	0	26
		(13)	(3)	(2)	(0)	(11)	(20)	(5)	(3)	(0)	(17)
公立大学	2	2	1	0	0	1	2	1	0	0	1
		(1)	(1)	(0)	(0)	(1)	(1)	(1)	(0)	(0)	(1)
私立大学	17	30	7	3	2	17	38	7	4	3	21
		(14)	(4)	(2)	(2)	(7)	(14)	(4)	(2)	(2)	(9)
大学共同利用機関法人	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)
独立行政法人等公的研究機関	13	17	1	4	4	0	20	1	4	7	0
		(9)	(1)	(1)	(3)	(0)	(10)	(1)	(1)	(5)	(0)
民間機関	3	3	0	0	0	0	3	0	0	0	0
		(1)	(0)	(0)	(0)	(0)	(1)	(0)	(0)	(0)	(0)
外国機関	8	9	7	0	0	1	9	7	0	0	1
		(5)	(4)	0	0	1	(5)	(4)	0	0	1
その他	4	0	0	0	0	0	6	0	0	0	0
		(2)	0	0	0	0	(3)	0	0	0	0
計	52	95	23	11	7	38	128	27	15	12	53
		(49)	(14)	(6)	(6)	(22)	(64)	(17)	(8)	(9)	(32)

10. 本年度 共同利用・共同研究を活用して発表された論文数

	共同利用・共同研究による成果として発表された論文数			
	うち国際学術誌掲載論文数			
①人文研に所属する者のみの論文(単著・共著)				
②人文研に所属する者と人文研以外の国内の機関に所属する者の論文(共著)				
③人文研以外の国内の機関に所属する者のみの論文(単著・共著)	2			
④人文研を含む国内の機関に所属する者と国外の機関に所属する者の論文(共著)				
⑤国外の機関に所属する者のみの論文(単著・共著)				

本年度発表されたインパクトファクターを用いることが適当ではない分野等

雑誌名	掲載論文数	掲載年月日	論文名	発表者名
京都美術史学	8	R3.3 (刊行 予定)	広隆寺講堂阿弥陀如来 像の造像背景と道昌	<u>高橋早紀子</u>
鹿園雑集	5	R3.3 (刊行 予定)	兵庫・浄土寺裸形阿弥 陀如来立像	<u>山口隆介</u>

11. 費目の30%を超える大幅な変更があった場合の変更理由

なし

12. 次年度の研究実施計画

なし

13. 次年度の経費

なし

14. 研究成果公表計画および今後の展開等

次年度の研究成果公表計画として、高橋が広隆寺講堂阿弥陀如来像に関する研究内容を進展させ、広隆寺講堂地藏菩薩・虚空蔵菩薩像に関する論文を執筆する計画である。また、今後の展開として、阿弥陀の印相の問題に焦点を当てた共同研究を構想している。本研究班の研究発表で施無畏与願印・説法印・定印・来迎印の作例が取り上げられたが、儀礼における機能の問題については今後の課題とする点も多く、本研究班を通じて形成した若手研究者の学術ネットワークを活用して共同研究の推進を図りたい。